

《第 31 号》「懐かしい未来」を市民の手で

都筑 建（自然エネルギー推進市民フォーラム）

「エネルギーを市民の手に」というスローガンは 1980 年代後半から言われるようになりました。エネルギーに特化した市民グループが排出しだした時でもあり、このスローガンのベースには「現代文明からのサバイバル」が横たわっていたといえます。

目の前には現代文明のシンボルのように立ちはだかる、人を寄せ付けぬ化石・核燃料の巨大な発電所があり、チェルノブイリ原発事故が起こると世界的な現代文明への検証が沸き起こりました。「人間に自由を」と同じレベルのこのひょうごは、水俣病をはじめとする環境問題と地球温暖化問題の台頭とあいまってその説得力を増していきました。

1992 年のリオのサミットは温暖化問題だけでなく、市民のスタイルも変える転機になりました。そして、さきの標語は「エネルギーが変われば暮らしが変わる」と賢い表現になりました。自信をつけた賢い消費者(コンシューマー)の参画を受けたからです。自然エネルギー中心の社会を実現させていくことはもう誰にも止められません。なぜならこのままの浪費社会が猛然と進めば、地球がいくつあっても足りないからです。東京都のフットプリントは 150 個近くの地球が要る生活といわれます。日本に住むグリーンコンシューマーは有利な遺伝子を持っています。自然と共生し、世界にもまれな環境型の江戸、明治の文化を持っていました。現代文明の明るい面の利便性や公平性を活かしながらイメージする「懐かしい未来」を描けるはずだからです。

省エネ技術が進むのに、トータルエネルギーでは社会的損失(ロス)が増え続けているからくりを解き明かし、本当に消費エネルギー量を減少させて共生しあう未来を創るのは市民であり、その中でも核になるのがグリーンコンシューマーだと確信します。

以上